序

本報告書は、2006年度に行われた2つの演習の成果をまとめたものである。

前期に行われたコミュニティ計画演習 Bでは、6名の学生とともに、生活協同組合について研究を行った。まず、『現代生協論の探求<現状分析編>』（現代生協論編集委員会編，2005，コープ出版）をテキストとして生活協同組合に関する基礎知識を共有した上で、教員から総論・歴史・福祉・農業・環境・大学生協の6つのテーマを提示し、それにしたがってレポートをまとめていった。

後期に行われた総合演習では、9名の学生とともに、食育をきっかけに学習を進めていった。最初に、『食・農・環境の経済学』（河野直践，2005，七つ森書館）と『日本人の食育賢く安心して食べるために』（橋本直樹，2006，技報堂出版）の2冊のテキストを手がかりにして、ラベルワークなども導入しつつ食育について考えていったが、食にまつわる重要事項がきわめて多岐にわたっているということに直面せざるを得なかった。当初は、食育について包括的にまとめる方向で考えていたのだが、食育以前の、食と環境に関わる基礎知識を理解することに重点をシフトした結果が、この報告書にまとめられた9つのレポートである。9つのテーマは学生が行ったラベルワークから導き出されたものである。

今回の報告書には『共的セクターの可能性と課題』という題名をつけたが、それは、多岐にわたる現代の諸問題を解決するための主体が新たに求められているという編者の問題意識に拠っている。20世紀前半、市場の失敗を克服すべく、ニューディールの「成功」をきっかけとして、政府が経済へ介入するようになっていった。しかし、先進国の経済成長が行き詰った1970年代以降、むしろ政府の経済介入による弊害の方に注目が集まるようになっていった。一方で、新自由主義的思想がその解決策として有力視されているが、その反動として貧富の格差が拡大するという問題点も明らかになっている。

そこで注目されているのが、協同組合やNGO・NPOといった、いわゆる共的セクターである。実際に、既存の共的セクターは現代の諸問題に対して積極的な活動を展開し、成果を収めている。しかしながら、そのような諸活動が一般にはあまり認知されていないばかりでなく、その存在意義についてもほとんど理解されていない。本報告書は、共的セクターの一部を取り上げたのみであり、また、共的セクターと直接はかかわりのない章もある。しかし、解決しなければならない問題が山積しており、それに対して共的セクターがどのような貢献をしてきたのか、することができるのか、といったことについて、わずかではあるが解答を示すことができたのではないかと考えている。

今年度は、共的セクターについて考える第一ステップであった。今後も、より深い検討を進めることによって、また、より多様な主体を対象を広げることによって、共的セクターの可能性を追求していきたい。

北海道教育大学旭川校社会学研究室 角 一典（助教授）